

辰巳天中殺

辰巳天中殺は、別名『濁流天中殺』とも呼ばれていますが、じつにしたたかな運氣をもっている天中殺です。この天中殺に共通した運氣は、一種の「しぶとさ」があるということです。

どんな荒れ地にでも、いつの日にかしっかりと根を張っている雑草のように、どんな環境・立場におかれても、必ず自分自身の世界を確立して行く。…そのためでしょうか、この天中殺の人は、社交面において最初のうちは理解されにくいものをもっていますが、つきあっていくうちに実に温かい人間性が顔を出し、永い年月にわたる人間関係がうまれてくるのです。

本来から、この天中殺は大衆型とか庶民型といわれているのですが、為政者の権力や体制の圧迫に対して逆らわないまでも、けっして従順ではありません。心のどこかに他人と迎合しないある種の頑固さをもっているのです。

人間個々の心なり、精神なりの次元の高低は、それぞれに違ったものをもっていますが、その時代と社会のなかであって、悪条件であればあるほど逞しい生き方をします。

その状態は大衆性の魅力なのであって、どのような人物とでも交流して行ける弾力性をもっています。

しかし、柔らかい人と考えないで下さい。

また、けっして弱いのもありません。内面は第一級の頑固さで支えられているのです。

それだけに、一つの集団の長としては、やや難欠な面があらわれてきたりします。

この天中殺のひとが、集団の長の立場に立ちますと、時代の流れに翻弄(ほんろう)されて、動乱の時代にのみ才能を発揮し運氣をもりあげ、平和の時代にさしかかると、自分みずから波乱を招く結果をつくる事になります。

この天中殺は、補佐役をつとめたり、集団の中の一員になったり、時には共同事業など、単独での仕事以外の場では常に自己の確率と運氣の安定があります。

これを占いの的に応用しますと、辰巳天中殺をもったオーナー社長は、後天的にめぐってくる天中殺の範囲(年運・月運・日運にめぐってくる天中殺)での禍いの度合いが最も大きい…という事になります。

このようにして後天的な天中殺は、その人の立場や環境で、その度合いが種々に違い、禍いの行程が現われてくるのです。

算命学には、天中殺法という教えのなかに濃淡論(のうたんろん)という勉強がありますが、天中殺の効力をおおよそ百八十位に分類してそれぞれに禍いの高低を説いていますが、詳細はたいへん複雑多岐(ふくざつたぎ)にわたりますので、ここでは省かせて頂きますが、要はこの天中殺を持っている人が、人生の上でもっとも心しなければならぬ事として、人間としての『視野の広さを身に付けること』である…と説いているのがあります。

環境に強いものを持つ人だけに、視野の狭さをもちますと、感情的になり、俗に云うところの「匹夫の勇」に落ち入る危険性を孕(はら)んでくるのであります。